

ラテンアメリカ —過去の人権侵害の 記憶をたどって—

写真・文 馬場香織
Kaori Baba



海軍機関学校（ESMA）本部。拷問拘留所の活動全体の統括が行われた



ESMA を中心とする元海軍施設の敷地は、現在「記憶と人権推進・擁護のためのスペース」となっている



主に囚人が拘留され、拷問を受けた ESMA の将校宿舍

昔メキシコの映画館で、本編の前に一〇分程度の短編映画が流れたことがあった。本編には何を観たかすっかり忘れてしまったのだが、名もなき短編映画の内容は今でもはっきりと覚えている。舞台設定は一九七〇年代末軍政下のアルゼンチン。映画は若い夫婦と小さな男の子が普段と変わらない穏やかな朝を迎えるシーンで始まる。突然何者かがドアを乱暴に叩き、平和な静寂を突き破る。夫婦は異変に気づき、母親は子どもを連れ添い屋根裏の倉庫に隠れる。やってきたのは数人の私服軍人で、抵抗する夫を押さえつけ、そのまま無理矢理連れ去ってしまった。「強制失踪」である。ラテンアメリカでは、こうしてある日突然軍や警察によって連れ去られ、そして二度と戻らなかつた人たちのことを「desaparecidos」（the disappeared, 失踪者）と呼んでいる。

民主化後のラテンアメリカ諸国では、過去の内戦や軍事独裁、あるいは文民による独裁体制下で起こった超法規的処刑、強制失踪、拷問といった人権侵害とどう向き合うかという問題をめぐって多くの議論がなされてきた。この問題を「移行期正義」（transitional justice）と呼ぶ。ラテンアメリカにおける過去の人権侵害の犠牲者やその家族そして人権団体は、真相究明と加害者の処罰による正義を求め、彼／彼女たちの闘いは今日に至るまで続いてきた。本稿では、二〇一四年から二〇一五年にかけて筆者が訪れたアルゼンチン、メキシコ、ペルーを取り上げ、過去の人権侵害にまつわる場所や記憶のための取り組みを、写真と文章で紹介したい。



エル・オリンボ拷問拘留所。元々は車両整備工場およびガレージであった



アウトモトーレス・オルレティ拷問拘留所。元々は車両整備工場であった

●アルゼンチン

一九六〇年代から一九七〇年代にかけて南米で登場した軍事独裁政権は、反共思想を含む国家安全保障ドクトリンの下に左翼活動家、ゲリラ、左派知識人、それらの家族や知人などを対象に徹底した弾圧を展開し、多くの市民が犠牲となった。なかでも一九七六年から八三年まで続いたアルゼンチン軍政下の失踪者数は、少なくとも一万人以上、多く見積もると三万人にのぼるといわれている。

アルゼンチン軍政下では、本稿の冒頭で紹介したような市民の誘拐を体系的に行う軍の秘密施設が全国に作られた。こうした施設は現在、「拘留・拷問・絶滅のための秘密施設」（以下、「拷問拘留所」と記載）と呼ばれる。ピーク時にはアルゼンチン全土で六〇〇以上の拷問拘留所が存在したが、なかでも最大規模の拷問拘留所として軍政期全体を通じて機能し、約五〇〇〇人にのぼる最多の犠牲者を出したが、首都ブエノスアイレス市内にある海軍機関学校（Escuela de Mecánica de la Armada, 以下ESMA。海軍下士官の養成校）である。ESMAではブエノスアイレス首都圏北部を担当した第三・三・二任務部隊（grupo de tareas）が活動し、主に囚人が拘留され、拷問を受けたのは、将校宿舍であった。最終的に殺害された囚人には、薬を飲まされ、生きたまま飛行機から海に落とされた者もいた。いわゆる「死の飛行」である。

アルゼンチンでは、過去の人権侵害に関する加害者の責任追及をめぐる紆余曲折の後、正義追求に積極的なネストル・キルチネル政権が二〇〇三年に発足すると、行政と市民団体の協力の下、人権侵害関連施設の回復・保存が進んだ。代表的なものがESMAであり、ESMAを中心とする元海軍施設の敷地は現在、連邦政府が管轄する「記憶と人権推進・

クラブ・アトレティコ拷問拘留所。連邦警察の建物の地階が使われた。のちに高速道路建設のため取り壊されたが、現在修復のための発掘作業が行われている



ビレイ・セバージョス拷問拘留所内部。元々は小規模の共同住宅であった。写真右側の階段を上って奥の小部屋に囚人が拘留されていた





ブエノスアイレス市内にある「記憶の公園」の壁。軍政下の国家による組織的暴力の犠牲者の名前と殺害（または強制失踪）時の年齢が刻まれている



アルゼンチン最高裁判所前の広場には、軍政下で殉職した法曹関係者の名前を刻んだ記念碑が設置されている

擁護のためのスペース」となっている。筆者も参加した一般向けのESMA見学ツアーでは、専門的な訓練を受けたガイドの解説を聞きながら敷地全体を見学することができる。

ブエノスアイレス市内には、ESMAの他に現在四つの拷問拘留所が同様に「記憶と人権推進・擁護のためのスペース」とされており、基本的には一般に公開されている。そのうちビレイ・セバージョス拷問拘留所は、市街中心部に位置する一見普通の民家であることに驚くが、軍事政権がいかに人々の生活圏の中に入り込むことで恐怖の支配を行っていたかを実感させられる。

●メキシコ

メキシコで二〇〇〇年まで続いた制度的革命党による事実上の一党支配体制は、左翼や農村ゲリラ、学生たちの運動を、ときに強く弾圧した。都市部における弾圧をもっともよく象徴するのが、トラテロルコ事件である。メキシコ・オリンピック開催を目前に控えた一九六八年一〇月二日、首都メキシコシティ中心部に近いトラテロルコ広場で、学生デモに対する軍の発砲により二五〇人以上が犠牲となり、多くの市民が軍・警察によって拘束された。

このトラテロルコ広場に隣接する旧外務省跡地に、二〇〇七年、メキシコ国立自治大学の文化センターが建設され、同センター内に「六八年記念館」が開設された。この記念館は、トラテロルコ事件を中心とする過去の人権侵害に関連する常設展示を行うほか、人権関連のさまざまなイベントを行っている。

●ペルー

ペルーでは一九八〇年以来、政府と極左反体制武装組織、とりわけセンデロ・ルミノソとの闘争が続

トラテロルコ広場（メキシコシティ）。写真中央に、1968年の軍による弾圧犠牲者を追悼する石碑がみえる



トラテロルコ広場横にある「六八年記念館」



バリオス・アルトス事件の建物（リマ）
(撮影：出岡直也)



「68年記念館」内の、牢獄をイメージした展示の様子

付記：草稿を読んで間違いを正してください。大串和雄、出岡直也の両氏に心より感謝します。本稿は科研費26780092の助成を受けた研究成果の一部です。

以上本稿では、ラテンアメリカ三カ国の移行期正義に関連する場所や、記憶のための取り組みを紹介した。ブエノスアイレスにある「記憶の公園」を訪れると、長い壁に刻まれた犠牲者の名前の脇に、黄色い造花が挿してあるのが目にとまった。きっと家族や親しかった友人が捧げたものだろう。残酷な人権侵害が決して遠い昔の歴史ではなく、現在進行形の出来事なのだ、はっとさせられる瞬間だった。

期正義の過程で重要な位置を占める。ペルーでもまた、真相究明委員会や市民団体によって、写真展などを通じて過去の人権侵害の記憶が試みられている。最近では「記憶、寛容、社会的包摂のための場所」と呼ばれる公的施設が開設された。

き、これまでに数万ともいわれる一般市民が巻き込まれて犠牲となった。アルベルト・フジモリ政権下の一九九一年一月にリマ中心部に近い貧困地区で起こったバリオス・アルトス事件では、民家の建物一階でパーティをしていた民間人（武装勢力と関係のない一般市民）に軍が銃を乱射し、子どもを含む一五人が殺害された。一九九五年にフジモリ政権が制定した恩赦法によって反乱鎮圧にかかわる一切の人権侵害が免罪されると、同事件の容疑者も釈放されるが、その後二〇〇一年に米州人権裁判所がバリオス・アルトス事件に関する判決のなかで、恩赦法が米州人権条約違反のため法的に無効であると認定し、事件の捜査が再開された。拘束力のある国際裁判所の判決が恩赦法を無効とした初めてのケースであり、こうした経緯からも、同事件はペルーの移行期正義の過程で重要な位置を占める。



ペルーの真相究明委員会主導で開設された人権侵害の写真展“Yuyanapaq”（ケチュア語で「記憶するために」）
(撮影：大串和雄)

バリオス・アルトス事件の建物内部。1階中央部分で、軍による民間人の殺戮が起こった

